

サポート・ご協力 ありがとうございます

■平成20年度 繼続会員(敬称略・順不同、2009年2月1日～2009年3月31日)

(正会員)鵜尾雅隆、黒澤学、小松子 (準会員)高清水ソフトウェアカンパニー兵藤博行、中野勇也、中村祥子、早坂恵美、針生祥子

■平成21年度 繼続会員(2009年2月1日～2009年3月31日) (準会員)男女共同参画センター横浜北

■企業・団体協力(50音順、敬称略)

株式会社岡元タイル(事務局スペースを社会貢献価格にて) 富士ゼロックス宮城株式会社(カラーコピー機を社会貢献価格にて)

お知らせ

**サポート資源提供システム
NPO向けに
中古パソコン
提供します**

入場
無料

●応募締切:2009年5月20日(水)

PC提供説明会

●日時:2009年5月14日(木)
14:00-16:00

●場所:せんだい・みやぎNPOセンター
※これまでPC提供説明会に
出席されたことのある
団体の方は、参加の必要はありません。

プロペラトクス vol.1

当センターが定期的にお送りする交流イベント「プロペラトクス」が始まります。今年度のテーマは「いのち」。各分野からゲストを招き「いのち」について皆さんと考えていきます。初回のトークゲストは、少年院向けラジオDJとしても活躍中の大沼さんをお迎えします。割烹の女将としてもお忙しい大沼さんから、どんなお話を飛び出したことやら! どなた様もご参加頂けます。

ゲスト:大沼えり子さん(NPO法人ロージーベル理事長)
開催日:平成21年5月21日(木) 開催時間:19:00-21:00
会場:シャンパンハウス「ル・オー・ルージュ」(仙台市青葉区大町)
参加費:2000円(ワンドリンク付き)
※予約制です。定員になり次第締め切ります。

加藤哲夫のNPO経営相談

開催日: 平成21年5月20日(水) 平成21年6月26日(金)
開催時間: 13:00~17:00
場所: せんだい・みやぎNPOセンター
相談料: 2,500円(1時間単位、会員は500円引き)
※予約制です。まずはお電話を。

連絡先・振込み先など

特定非営利活動法人 せんだい・みやぎNPOセンター

〒980-0804 仙台市青葉区大町2-6-27 岡元ビル4F

TEL:022-264-1281 FAX:022-264-1209

E-mail:minmin@minmin.org HP:http://www.minmin.org/

▼会費・寄付のお振り込みは、こちらへ!

郵便振替:02260-3-16325

仙台銀行 中央通支店 普通 4094031

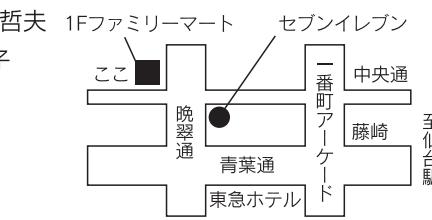
加入者:特定非営利活動法人せんだい・みやぎNPOセンター

発行:(特活)せんだい・みやぎNPOセンター

代表理事 大滝精一・加藤哲夫 1Fファミリーマート セブンイレブン
編集部:小川真美・紅邑晶子

発行日:2009年5月1日

デザイン:氏家朗



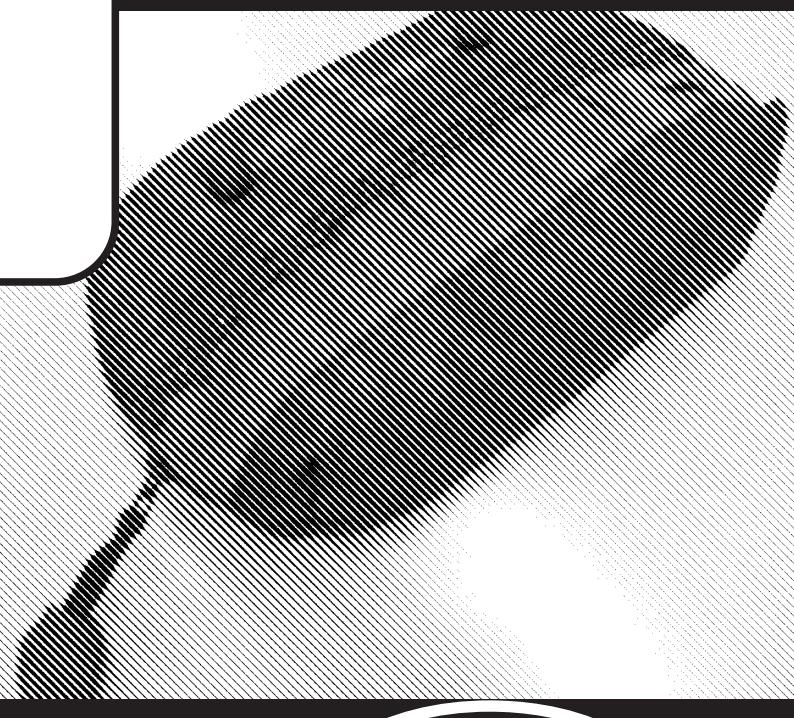
岡元ビル4F 仙台駅から徒歩20~25分

NPO法人認証団体数 | 宮城県 556団体 2009/4/10現在 | 全国 36,826団体 2009/2/28現在(内閣府)

「みんみん」vol.62号において、全国のNPO法人認証団体数が正しくは36,300のところ363,000となっていました。お詫びして訂正いたします。

みみ
んん

MY FAVORITE お気に入り小物拝見



【題字】谷川俊太郎さん

理事対談のお相手、「ホールネット仙台代表理事の宗
一チ。2年ほど前から持ち歩いていて、中にはポスト
イットや鍵、歯ブラシ、チョコレートなどが入ってい
ますが、特に入れるものを見定しているわけではない
そうです。ちょっとした困りごとがあつた時、このボ
ークを覗くと意外に役立つものが入っていて、助かる
そうですね。不思議なボーチですね。

■目次

- P2～3 理事対談
- P4…… 日本カードセクター経営者協会設立に向けて
- P5…… せんだい・みやぎNPOセンターの事業から(2009年4月)
ちょっとかじってみよう! CSR
- P6…… 寄稿「第2フェーズへ」深尾 昌峰さん
理事リレーコラム「私と市民活動」山田 晴義
- P7…… 活動ダイアリー
らんち de MATCH♪
- P6～7 新スタッフ紹介
- P8…… 新規会員・継続会員、お知らせ、編集後記、連絡先等

理事対談

「新たな視点に立つ男女共同参画」

第6回の理事対談は、特定非営利活動法人イコールネット仙台の宗片恵美子代表理事と当センターの黒澤学常務理事の対談です。男女共同参画に長年に渡り関わってきたお二人。男女共同参画の今までとこれからについてじっくり語り合いました。

■社会学級からイコールネット仙台立ち上げまで

黒澤／宗片さんは、イコールネットの前はどのような活動をしていたんですか？

宗片／ずっと社会学級（注1）で活動をしていました。今と違つて私が社会学級で活動していたころは、女性の生き方や男女平等が大きなテーマとしてありました。当時は、子どもを預けて学ぶなんてとんでもないと言われていました。

黒澤／今の社会学級とはだいぶ違いますね。

宗片／そうですね。昔はとても硬いことをテーマに活動していました。でもその学びの中で自分たちの生きにくさに気付く人が多かったと思います。だから妻でもなく母でもなく一人の女性として生きたいという、自分の中にあるわだかまりみたいなものを周りの人も持っていたことを知り、社会的な問題だということに気づきました。同時に社会学級を自分たちで運営することで自分の活動を広げていくエンパワーメントになりました。企画力や交渉力もつくので社会学級で学んだことは、今に活きてていますね。社会学級があつたから今の自分があるのだと思います。

黒澤／宗片さんの原点は社会学級なんですね。仙台市の男女共同参画に関わるようになったのはどういった経緯からですか？

宗片／「グループ（アイ）」という女性の体と心と性という問題を取り組む団体を社会学級の次のステップとして作りました。この



代表理事
特定非営利活動法人
イコールネット仙台
ゲスト
宗片 恵美子さん

テーマは、男女共同参画の中でとても重要だと思ったのです。「グループ」の活動で利用していたのがエル・パーク仙台（注2）で、そこでたくさんのグループが知り合いネットワークを形成していました。ちょうどそのとき仙台市が本格的な女性センターを作るという話が出てきて、私たちが本当に望んでいる施設を作りたいという思いで「わたしたちの女性センターを実現する会」をつくりました。

黒澤／宗片さんは、せんたい男女共同参画財団の理事もされてましたよね？

宗片／「わたしたちの女性センターを実現する会」では、提言の中に専門性のある財団が男女共同参画を促進するためには必要であるということも盛り込みました。その後、せんたい男女共同参画財団が作られ2年ほど理事をやっていましたが、2003年にエル・パークの市民活動スペースの運営を民間に委託することになり、理事を辞めてイコールネット仙台を立ち上げることになりました。

■災害と男女共同参画

宗片／最近、宮城・岩手内陸地震の影響もあり災害における女性のニーズ調査の報告書をまとめました。仙台市内に住む女性約1100人を対象にアンケート調査を行いました。女性は、子育てしていたり、介護をしていたり、多様な環境で暮らしています。その人たちが、災害が起きたときにどのような不安を抱えているのかが大事だと思います。防災はどうしても男性の領域と考えられがちです。地域の中で暮らしている女性が実際に災害が起きたときに、いかに自分を守り、周りといっしょに支えあいながら避難するかについて具体的な対策がとられていないのです。今回、昨年の岩手・宮城内陸地震、2003年の宮城県北部地震の体験者を対象にインタビュー調査も行いました。女性たちは、子育てや介護についてとても現実的な問題をたくさん抱えていて、その訴えについてどのような対策が取れるかを一つ一つ考えなければならないということを一つの問題提起としてまとめました。この調査報告会には、女性だけでなく男性も数多く出席していましたが、避難所に授乳室がない、更衣室がない、時にはセクハラや暴力が起きる、そういうことを現実的に考えて欲しいですね。

黒澤／確かに被災後の復旧段階での復興計画作り、避難所運営企業からの救援物資提供など多くは男性が中心となってしまい、女性・子どもの視点が抜け落ちています。新潟中越地震の時、母親のグループが立ち上がり女性・子どもの視点で被災地へ救援物資を送るという活動に協力したことがあります、生理用品や乳幼児の肌着、紙おむつなど、男性を中心に作ったパッケージには絶対入らないものが挙がっていました。

宗片／やはり意思決定の場や運営のところに女性をきちんと入

れていく必要があることを第一に提言しています。女性の声を届けるのは女性なのでその人たちが組織の中枢に入っていってもらわないと変わりません。

■多様な“切り口”で仕掛ける！

宗片／防災をテーマにすると男性にも関心をもっていただけるので、そこから男女共同参画に気づいてもらう良い切り口になっています。やはり今までの経験の中で多くの人に男女共同参画を受け入れてもらうためには手法が必要だと思いました。

黒澤／意識改革ばかりを言っても意識は変わらないので、（この報告書のように）具体的なヒアリングを通じて、男女共同参画の視点が大切だということを見せられると納得させられます。

宗片／イコールネットでは、この活動以外にも劇団立ち上げやビデオ制作講座を行いました。どちらも、まずジェンダー意識を育てる連続講座を受講してもらいました。劇団は「プロデュース力養成セミナー」という講座の受講生が、講座終了後に立ち上げたもので「劇団くりっぷ」といいます。ここでは「モモタロー・ノーリターン」という桃太郎の話を男女共同参画劇にして性別役割分業意識を引き出そうとしました。おじいさんとおばあさんの役割を変えて、おじいさんが川で洗濯するのがいかに大変かをわかり、芝刈りに行つたおばあさんは、枯れ枝を拾うなんてしたいしたことないことがわかる、というもの。ビデオ制作講座では、女性たちが撮影技術や編集技術を覚えて、「団塊世代のこれから夫婦を考える」をテーマに作品を作りました。男性のグループや女性のグループ、カップルなどに妻との関係、夫との関係、これからの夫婦のあり方についてインタビューをして、それを元にワークシヨップをして皆で話し合いをしています。見たいでしょ？

黒澤／いやいや、怖くて見たくないですね。（笑）

宗片／皆、言いたい放題だからおもしろいですよ。（笑）講演会という形ではなく、このようにいろいろ手を変え品を変え男女共同参画をアピールしていますが、別に男女共同参画を意識しなくても気がついたら相手を大事に思う気持ちが育ってくれれば良いのです。

黒澤／特にジェンダーの場合、違う分野の人を集めて考えさせる仕組みは大切だと思います。

宗片／そう思います。だから今回の災害における女性のニーズ調査の報告会も男性が大勢来ましたが、そこで初めて男女共同参画に出会った人も多いと思います。

黒澤／男女共同参画を男女共同参画の切り口から取り組むと女性しか集まらないですが、防災の切り口から取り組むと男性も集まります。そこで男女共同参画を全面に出さない形でアピールできれば良いですね。

■男女共同参画も“連携”と“若返り”を！

宗片／私たちは市民活動を支援しているわけですが、やはり活動をどのように広げていくかが課題ですね。エル・パークで活動している人々は、20年以上活動している人が半分以上で高齢化してきています。

黒澤／若い人は増えていますか？

宗片／増えないです。これからはもう少し若い層に関心を持つてもらうために、団体と若い人をつなぐマッチング事業もやりたいと考えています。それとサポセンで活動している団体とエル・パークで活動している団体をどこかで出会わせたいですね。

黒澤／エル・パークとサポセンの利用者懇談会のようなものがあれば良いですね。

宗片／そうですね。同じ活動分野でなくても、お互いの活動を知るだけでどこかで必ず接点が見つかるはずです。最初は、少数でも良いのでいくつかの事例を作りたいですね。

黒澤／それでは最後に一言お願いします。

宗片／日常生活の中で女性だけでなく男性も生きにくさを感じていると思います。生きにくさから自由になるためにお互いに自立した関係で出会うのが男女共同参画の基本だと思います。そうすれば相手をもっと尊重し、お互いに生きやすい人生を生きられると思いますし、人間らしい生活にもつながると思います。

黒澤／今日はありがとうございました。

（記録・編集：桃生和成）

（注1）仙台市内のすべての小学校に地域の老若男女が学べる生涯学習の場として、仙台市教育委員会によって1949年に設置された。

（注2）女性の自立と社会参画の促進と市民の文化活動の場として、仙台市によって1987年に設置された。

黒澤
せんたい・みやぎNPOセンター
仙台市民活動サポーターセンター
常務理事
センター長



JACEVO

日本サードセクター経営者協会設立に向けて

NPO法10年という枕詞も、そろそろ賞味期限切れになりかかっている。この10年から15年、社会の大きな流れは、古い日本社会の構造の崩壊と、グローバリゼーション下での国際競争を勝ち抜くために、という名目での、峻烈なコストダウンや効率化、規制緩和によって引き起こされてきた。中でも、投機的な経済の破局による社会矛盾の激化は、政府も無視できなくなり、一定の対症療法的な対策が進められてはいる。そんな中、NPOに対するかなりの期待があり、さまざまなNPOへの支援や基盤整備が語られてきた。しかし、いつまでも「力がないで助けてください」と言っている訳にはいかなくなっている。むしろ、「何を作り出しているのですか?」という真摯な問いかけこそが、NPOを成熟させるものだということに、少なからぬ人々が気づきだしたところである。

さて、15年ほど前に、日本社会にNPOというコンセプトが必要であると考えた一群の人々の間では、政府・行政セクター(第一セクター)と企業セクター(第二セクター)と並んで、名実ともに必要な力量を持つ市民セクターあるいはNPOセクター(サードセクター)を構築し、3つのセクターがそれぞれ適切な役割を果しながら、互いを牽制し、バランスの取れた多元的な社会運営を行うことこそが、大きな目標であったはずである。

現状はどうか? 喧伝されるように、NPO法人の数だけは、35000団体を越えている。しかし、その内実は、年間事業額500万円未満が半数を占めるなど、まだまだ財政基盤の弱さが目立ち、社会に対する提言機能も充実しているとは言いがたい。また、情報開示の点からは、圧倒的多数の団体が、国や県が示す間違った記載例の書式どおりの報告書を作成、提出しており、NPO法の基本精神の柱である情報公開義務(アカウンタビリティ)が果たされているとは言いがたい。もっと大きな課題は、そもそもサードセクター全体から見れば、NPO法人はその一部であり、社団法人、財団法人、社会福祉法人や学校法人、医療法人などと、協同組合やワーカーズコープなどの法人群全体のあり方が整理されなければ、日本のサードセクターは、ひ弱なNPO法人セクターだけの肩にかかってしまう。しかし、昨年12月1日より施行された改正公益法人法によって、ようやく110年の歴史的呪縛から解放されたばかりの公益法人群と、相変わらず行政の直接的支配下にあり、大部分の法人はサードセクターとしてのアイデンティティを持ちえていない社会福祉法人群、その他の法人群に分断されたままの状態が続いているのであり、これでは、日本のサードセクターの確立は望めない。

当センターでは、一昨年来、この課題に取り組み、社会福祉法人大阪ボランティア協会(大阪)、特定非営利活動法人フォーラム

せんだい・みやぎNPOセンター 代表理事 加藤 哲夫

21NPOセンター(名古屋)とせんだい・みやぎNPOセンター(仙台)の3つの地方の支援組織が、1年間の研究会を開催し、かつ英国の支援組織への視察調査を行い、その結果をもとに、日本に、個人加盟の法人格に縛られない、横断的なNPOの経営者のネットワークを作り出そうという構想を練り上げ、60数名の呼びかけ人と共に、この3月には準備会を結成したところである。

モデルにした英国の団体は、ACEVO(英国のNPOのCEOの協会)である。この協会は、設立して20年になり、個人正会員(CEO会員)が約2000人、その所属組織の年間事業額が、英国のNPO全体の事業額の約2分の1という組織である。日本と違い、理事会と理事会に雇用されるCEO(現場の執行責任者・事務局長のようなもの)との間の緊張関係が、組織設立の動機だが、この10年、ブレア政権下でのNPO政策によって、英国のNPOは大きな躍進を遂げており、このACEVOが果たした役割も大きい。(委託契約金額の中に、間接費を認めさせることに成功したフルコストリカバリーの考え方を提倡・普及することに貢献した。)

ACEVOは、①つなぐ、②伸ばす、③代表する、の3つのコンセプトで活動しており、NPOの現場の経営者の力量の向上とアドボカシー活動を中心に活動している。

私たちは、日本版ACEVO=JACEVO(日本サードセクター経営者協会)を、全国の志あるNPOの経営者(理事長や常務理事、事務局長など実質的な経営の執行責任者)に呼びかけ、日本のサードセクター全体のネットワーク(つなぐ)と力量形成(伸ばす)とアドボカシー(提言する)を展開していく全国組織を、この秋に立ち上げようとしている。9月1日に東京での設立総会を皮切りに、9月5日には、せんだい・みやぎNPOセンターの総会の記念事業として、英国のACEVOの敏腕CEOのバブ氏の記念講演を予定している。当センター単独の資源と人材ではカバーしにくいマネジメント支援領域やネットワーキング、そして政策提言につながる活動を、自ら設立する全国組織との連携によって行う予定である。詳しい情報は、今後、Webや各地の説明会で展開していく予定であり、ぜひ注目いただきたい。



せんだい・みやぎ NPOセンターの事業から (2009年4月)

みやぎNPO夢ファンド ステップアップ 支援プログラム 公開コンペ

4月11日(土)午後、みやぎNPOプラザにおいて、みやぎNPO夢ファンドステップアップ支援プログラム公開コンペを開催しました。

■ 幅広い相談が寄せられた応募相談会

宮城県内で活動するNPOを応援する「みやぎNPO夢ファンド」。今年度のみやぎNPO夢ファンドのステップアップ支援プログラム(助成総額100万円・2団体)では、応募に先立つて、2月25日、3月3日、3月5日の3日間、応募相談会を開催しました。

その結果、計13団体、延べ人数18名の皆さんがあつた事務局にお見えになられ、1団体につき約1時間以内、申請書の書き方のポイントのみならず、組織運営上のアドバイスまで、幅広い相談内容に加藤代表理事と紅邑常務理事が対応しました。

■ 出場団体同士の絆を深める交流会を企画

応募締切日の3月10日には、昨年度よりも3件多い、計8団体の申請を受け付けました。運用委員の皆様の厳正なる書類審査の結果、以下の4団体(特定非営利活動法人ほつぶ、特定非営利活動法人チャイルドラインみやぎ、ハーベスト、特定非営利活動法人くりこま高原・地球の暮らしと自然教育研究所)が公開コンペへ駒を進めました。

4月11日には、みやぎNPOプラザで公開コンペが行われ、申請内容のプレゼンテーション(10分)をはじめ、運用委員による質疑応答(10分)の後、今年度、初の試みとして、公開コンペを戦った者同士の友情を深める小さな交流会を企画。団体同士の絆を深めるひとときとなりました。

■ 至難な審査の結果、2団体に助成が決定

どの申請内容も差し迫った社会の課題解決を志すものだけに優劣をつけがたく、運用委員の皆様も頭を悩ませながら、審査に臨んでおられましたが、平成21年度のステップアップ支援プログラム(最大3年間、100万円)は、特定非営利活動法人ほつぶの「高次脳機能障害者と家族の支援ネットワークづくり事業」と、特定非営利活動法人チャイルドラインみやぎの「児童虐待防止・ヘルプネットワーク事業」に対して、助成が行われることになりました。(谷口恵子)

チョット

かじってみよう! CSR。7

「せんだい・みやぎNPOセンターの 今後のCSR事業の方向性」

2009年3月3日(火)、当センターの今後のCSR事業についての方向性を決める会議を開きました。まずは針生理事の経営するハリウコミュニケーションズ株式会社が教育CSRの一環で実施している理科教育支援の話題提供で始まりました。『この事業は、ものづくり企業の社員が学校に来て理科の実験授業を支援してもらうという事業を全国10箇所で実施しており、理科の実験が具体的に社会や仕事のどの部分にどう役立っているかをダイレクトに子どもたちに伝えていくことができる。企業の持つリソースを子どもたちに還元していく教育CSRという取り組みは、地域人材育成という視点で非常に意義が大きいと思う。』針生理事のお話を受けて様々な意見を出し合いました。

その中で一番多かったのが、企業の環境CSRの話題。企業とも様々な関わりのある大滝理事からは次のようなコメントがありました。『環境エネルギーの分野は企業、NPOにとって魅力。ビジネスの発想だけでなく日本の最先端の技術とNPOの発想の連携が必要。ビジネスとしても成り立っていくのが大切だと思う。環境エネルギーの分野はこれから追い風。落ちてきたお金を今までの使い方ではなく、永続的な社会、地域、国際的な貢献に使うことに戦略的に取り組む必要があると思う。』

増子理事は、去年日本財團のCANPAN CSRプラスにエントリーしたことをきっかけに、CSR関連の講師としてお話を聞く機会が増えたそうです。『中小企業は、地域のためにやっていることも、当たり前すぎて、それがCSR活動の一環であるということに気づかない場合が多い。それに気づかせてあげるのが私たちの役目だと思う。』

その他、『結果的に企業を応援していくことが地域発展にも結びつくのではないか。』『宮城版ショッピング・フォー・ア・ベターワールド※のような地域のための企業を応援するためのカタログづくり』といった具体的な提案がでました。(田内亜紀子)

※より良い世界をつくるための買い物の仕方をまとめたガイドブック。

●全国の支援センターから

「第2フェーズへ」

(特活)きょうとNPOセンター 常務理事・事務局長 深尾 昌峰さん

京都では今、「(財)京都地域創造基金」(<http://plus-social.jp>)づくりに奔走しています。この財団はきょうとNPOセンターの10周年記念事業として取り組んでいます。この10年間、せんだい・みやぎNPOセンターの皆さんとも様々な局面で連携しながら、豊かな市民社会の創造に向けて取組を進めてきました。市民活動の認知の高まりや裾野は広がりつつありますが、サードセクターを支える基盤、特に資金の確保は多くの団体にとって共通の課題です。この課題に民間なりのアプローチで解決に迫れないか…と考え行動に移したのがこの財団構想です。

この財団は、地元の金融機関との連携を通して融資や土地の利活用プログラム等も展開予定です。基本財産も市民の寄付によって構成する予定で、この原稿を書いている時点で180人以上のみなさまから思いを託して頂いています。

中間支援組織の役割が第2フェーズに移った今、きょうとNPOセンターでは資源仲介機能の強化を中心、サードセクターが地域社会に息づく仕組みづくりに一層努力していきたいと思います。

多様な市民活動を支えるのは決して行政でなく、市民社会だ!!ということを具体的な仕組みづくりを通して具現したいと思います。

●理事リレーコラム

「私と市民活動」

山田 晴義 (東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会 会長)

仙台NPO研究会を立ち上げてからおよそ15年が経ちました。この研究会はもう存在しませんが、それまでの地域づくりの方を考えるために、多様な分野の人たちとの共同学習の場として組織されました。結果的に多様なネットワークが生まれ、その延長上にせんだい・みやぎNPOセンターやまちづくり政策フォーラムなどのNPOが生まれ、自治体の市民協働の施策にも大きな影響を与えることができたと思っております。のことからも、ネットワーク・協働の可能性の大きさを痛感しています。

私自身の中では、NPOの学習は地域づくり研究の一環であり、その後コミュニティ・ビジネス、コミュニティ再生の重要性に気づき、その実践的研究に取り組んで参りました。最近では、産業基盤の脆弱な衰退地域を再生し、市民協働の社会を構築するためには、NPO、地域コミュニティ、行政のほかに大学、シンクタンク、企業などを加えた多様かつ高度で実践的な支援システムが必要だと感じるようになりました。昨年度は、市民の目線に立った中立的で公正な組織としての「東北圏地域づくりコンソーシアム」の設立を目指して、その推進協議会を立ち上げました。この課題は国で策定中の東北圏広域地方形成計画案のなかにも取り上げられ、実現の機運も高まっております。

私自身は、この春で大学を定年退職いたしましたが、このコンソーシアム実現に向けての活動には引き続き関わっていきたいと考えております。4月からは仙台を離れ、都市と農村の2地域での暮らしを楽しみたいと思っています。また、宮城大地域連携センターでは、今年4月から財団法人宮城県地域振興センターの一部機能を引き継いで、「地域振興事業部」を置くことになりましたが、これまでその運営方法等の検討に関わってきたことから、そのアドバイザーを務めることになりました。つきましては、仙台にも時々出かけることになると思いますので、引き続きよろしくお願い申し上げます。

新スタッフ 自己紹介

佐賀県出身、特技はボーリングです。九州で生まれ、今いる多賀城市に来るまで37年と10か月、周りの人たちに助けられながら生きてきました。これから恩返ししたいと思います。よろしくお願いします。
(荒川雅彦 TSS)

はじめまして！遠藤由紀と申します。この度ご縁がありまして、こちらで非常勤勤務させて顶きます。趣味は船釣り、お菓子作り、小動物(犬・小鳥)を飼う事です。いつも笑顔で頑張りますので、どうぞ宜しくお願ひ致します。
(遠藤由紀 SSS)

TSS:多賀城市市民活動サポートセンター SSS:仙台市市民活動サポートセンター



当センタースタッフの

■市民活動ダイアリー

ある人の勘違いでミーティングに連れて行かれたのがきっかけで、わかめの会にかかるようになって早2年。今回は3月の活動の様子を振り返ってみたいと思います。

三陸・宮城の海を放射能から守る仙台の会(わかめの会)

2006年6月、「六ヶ所村ラブソディー」上映会実行委員を中心に結成。六ヶ所村核燃料再理工場による環境の放射能汚染問題に対処するため、さまざまなイベントやアドボカシー活動、多様な主体とのネットワークづくりを行っている。

■3月8日(日)

わかめの会山岳部で七ツ森の笹倉山へ。今年初めての山登りです。昨年は早池峰山にも登りました。わかめの会では課外活動(?)が盛んで、山岳部の他にもサーフィン部や金魚飼育部などがあり、自然に親しあり生命を大切にする活動をしています。

■3月17日(火)

会報「わかめsoup」編集会議。サポセン1階で編集部が打ち合わせていたらTさんが差し入れのごま餅と納豆餅を持って登場。おいしくいただきました。

■3月18日(水)

2月に盛岡で開催した「六ヶ所村ラブソディー」東日本サミットの報告書の発送作業。週末に他のメンバーが印刷してくれた報告書を帳合し、封筒に詰めていきます。無事、サポセン閉館前に作業を終えることができました。

■3月25日(水)

毎日新聞青森支局のG記者が連載記事の取材で来仙。エルソーラで1時間ほどのインタビューの後、会議の様子を取材してもらいました。わかめの会の会議の特徴は、おいしい差し入れがどつさり並ぶこと。この日はパンにコロッケをはさみ、串カツを食べながらアクションプランの進捗やパタゴニアのストライプイベントの企画などについて、和気藹々と話し合いました。会議の後はG記者と一緒に居酒屋へ。「みなさん、サークルみたいな雰囲気ですね~」とはG記者の談。(布田剛)

第3回

らんち de MATCH♪

こちらの勝手なマッチングにも関わらず、毎回多くの共通項で盛り上がる「らんち de MATCH♪」。今回のゲストは高橋節子様(「将監沼の自然」とふれあいを育む会 事務局長)と、荒川陽子様(地域生活支援オレンジねっと 代表)です。

「将監沼の自然」とふれあいを育む会は、将監沼の整備を中心に地域コミュニティの再生を目的とした活動を、「オレンジねっと」は地域の生活支援や支え合える地域づくりを推進していらっしゃいます。そういった団体の代表の方らしく、話題は我が街「仙台」と「地域」から幕開けです。

お二人とも「仙台には市民のための施設が建てられたとしても、それをつなぐ人、物理的ネットワークが少ない。人と人がつながることにより、より市民が暮らしやすい都市デザインができるはずなのに。」と仰ります。仙台という街に対しては「まだまだ」の部分も感じられているようですが、やはり狭い範囲ではどうなのでしょうか。

オレンジねっとの活動地域では温かい交流があるそうで「私たちの団体は、地域の応援なしではここまで続けてこられなかった。」と荒川さんは振り返ります。ところがそんな地域ばかりではなく、小競り合いをしている地域もあるようです。高橋さんは「地域の皆さんの熱意が行政も動かし大きな成果になっているが、色々な事情でどうしても温度差はある。地域をまとめるためには、やはり上に立つ人が大事。行動力と共に皆の意見をよく聴ける人かどうかが地域を、ひいては仙台の街を良くしていくポイント。」と指摘されます。

他にも地域と学校、市民センターの役割など、話題尽きることなく続いた「らんち de MATCH♪」、次回もご期待下さい！(小川真美)

こんにちわ！八戸出身の私は、関東方面で10年。多賀城に住んで15年になります。丘の上にある、このサポートセンターで、明るく楽しく素晴らしい出会いがあることを信じて、小さなことからコツコツとモットーに幸せな時を刻んでいけたらいいなと思っています。(木村由美子 TSS)

かつて多趣味、いま無趣味。いわゆる団塊の世代です。関西出身で、仙台での生活は約20年。第2の故郷になりました。転勤、転居が多いのですが、今のところは8年目を更新中。仙台でのさまざまな交流を願っています。(吉村民子 SSS)

今年からおよそ1年間ボランティアスタッフとして働くことになりました。どのような方々と出会えるのか、どのような仕事が待っているのかは不安ではあります。徐々に慣れつつ頑張りたいと思います。(針生一平 大町)